

特集 南宇和サッカーのあの日とこれから

“南宇和は今も特別な場所 サッカーを通じて恩返しができれば”



西予市立野村中学校教諭 ひろ ゆき
二神 洋幸

昭和48年1月生まれ。緑小、城辺中を経て南宇和高校に進学。全国制覇を果たした大会では3回戦で値千金のゴール。自身の誕生日と重なった決勝戦に勝利し、大会優秀選手に選出されるなど活躍した。



愛南町立城辺中学校教諭 まさ き
山本 雅貴

昭和47年5月生まれ。一本松小、一本松中を経て南宇和高校に進学。全国大会直前の12月に膝を手術しながら、満身創痍の状態でも試合に出場。ケガを感じさせないプレーで攻守に貢献した。



鬼北町立広見中学校教諭 かず ひろ
加賀山 和宏

昭和46年4月生まれ。立間小、吉田中を経て南宇和高校に進学。ゴールキーパーに転向したのは中学時代。高校では下宿生活を送りながらサッカーに励み、守備力が自慢のチームを最後尾から支えた。



サッカー協会
藤田 有紀さん



平成2年1月8日、南宇和高校サッカー部が「第68回全国高校サッカー選手権大会」の決勝戦で埼玉県代表の武南高校を破り、四国勢初の優勝を成し遂げました。4年連続8回目の出場、初めての決勝戦進出でしたが、後半開始早々に2得点を奪っての鮮やかな逆転劇でした。

あれから28年。あの試合に出場し、現在はともに中学校教員でサッカー部の監督、サッカーを始めたのも小学3年生という共通点を持つ3人の方に集まっていたいただき、当時のことやあの優勝がもたらしたものの、今の南宇和のサッカーについて思うことなど、南宇和サッカー協会事務局の藤田有紀さんの進行のもとで語っていただきました。
(取材日：10月10日)

“国立は地響きのような歓声”

決勝の舞台は国立競技場。当時の南宇和郡の人口よりも多い4万2千人の大観衆でした。試合前はすごく緊張していたのですが、ピッチに出るとスタンドの右側に南宇和の応援団が見えました。あれは気持ち良かったですね。ああ、ここで試合ができるんだなと思って。

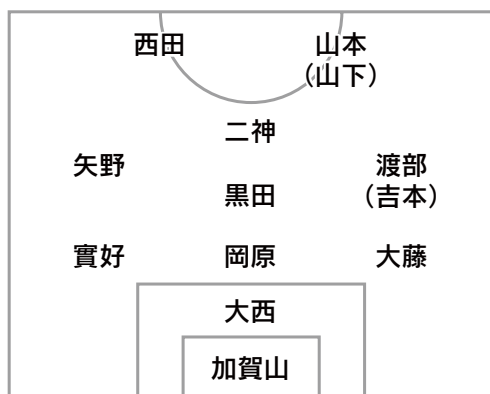
決勝戦は国立で戦う2試合目でしたから、準決勝に比べたら緊張はそれほどでもなかったです。それよりも私は準決勝で一人浮き足立っていました。

歓声が足元からぐわーっという感じでした。特に武南がボールを持ったときは。あれはすごかったですね。

特に記憶に残っていること——
決勝戦前日のミーティングで石橋(智之)先生が「明日は武南が勝つ。絶対に武南有利だ。お前たちが勝つとは誰も思っていないから気楽にやれ」と言っていたことをよく覚えています。

前半11分の失点について——
あのシーンは何回見直しても

決勝戦のフォーメーション



得点:[南]西田2 [武]伊藤 ()は途中出場

優勝までの軌跡

1 回 戦	2 - 0	日立工
2 回 戦	1 - 1	帝京
	(PK 5 - 4)	
3 回 戦	1 - 1	四日市中央工
	(PK 5 - 4)	
準々決勝	1 - 0	仙台育英
準決勝	4 - 1	前橋商
決勝	2 - 1	武南

僕のミスです。シュートを防げ

なかったことではなくて、その直前の浮き球に対して行くのか行かないのか。その判断のところで勝負が付きました。先制点を取られて、非常にまずいなという気持ちでした。

■僕もやばいなと思いました。でも、ハーフタイムに石橋先生が「今日はいける！」と言っていたのを覚えています。この人は何を言っているのだろうと。

■失点に対する危機感は全くなかったのですが、これで終わっちゃうのかなとは思いました。

■後半わずか25秒の同点弾——ゴールシーンの近くにはいたのですが、その辺りの記憶があ

まりないですね。

■加僕も同じです。後ろから見ると本当に、あらあらあらという感じでした。

2分50秒西田のゴールで逆転——

■黒田(一則)君がヘディングで競ったこぼれ球を私が受けて、出したパスが得点につながったのでよく覚えていきます。

■あれをヘディングで競ったのは俺だよ。

■あれ、ずっと黒田君だと思ってた。逆転したのが後半の立ち上がりすぐだったという気がしませんでした。後から聞いて、そんなに早かったんだと。ずっと戦っていたイメージがありましたね。

夢が現実に！優勝は地域之力

優勝した瞬間のこと——

■加僕、出遅れたんですね。最後に相手のシュートが大きく外れて、そのボールを取りに行ったらときに笛が鳴っていました。

ボールを持って振り返ったらみんなが喜んでいて。優勝した瞬間はすごくほっとして、しばらくしてから喜びが込みあげてきました。

■タイムアップまでは時間が長く感じました。早く終わってほしいなど。優勝した瞬間は嬉しかったですね。

■(途中交代したので)もちろん最後までピッチにはいたかったです。ベンチからはみんなが声を出していて、最後の瞬間は飛び出していきました。それと、当時この人(二神さん)がずっと「自分の誕生日に国立で決勝戦を戦って優勝する」と言っていました。私はそんなこと無理だろうと思っていました。また、部員で毎日順番に書いていたサッカーノートの表紙には「全国制覇」と書かれています。それが、それを見ても全然現実味がなくて。だから優勝した瞬間

は、こんなことが本当にあるんだなという気持ちでした。

■全部で6試合ありましたが、あの大会は楽しくてしかたがなかったです。もっと試合があればまだやりたいくらいでした。

優勝した要因について——

■やはり地域之力ではないでしょう。郡外から来た私にも中学年代の指導者の方はよく声をかけてくれました。指導者ではない方も含めて、地域の方がグラウンドにいるという環境がありましたよ。

■それと一つ上の年代の結束力、チームワークです。それに僕らは引っ張ってもらいました。これは本当にそう思います。

■中学生の頃は高校生と一緒に練習をさせてもらったり、小学生の頃は高校生が練習に来てくれたりしました。それとやはり、一つ上の年代のチーム力が大きかったと思います。

■加今、上の年代が良かったと言ってもらいましたが、2年生は頼りになりましたよ。みんながやるうという気持ちは下の学年も同じだったと思います。



“自分たちがしてもらったことは返したい”



優勝記念誌(南宇和高発行)や当時のサッカー雑誌をめくりながら、28年前の記憶をさかのぼりました

全国制覇がもたらしたもので、この年齢になってくると恥ずかしさがあります。同年代以上であれば覚えている人はいますが、下の年代になると分からないうですよね。今も指導者としてサッカーを続けていますが、あのときに日本一を経験したことで、やっぱり勝負に負けたくないという気持ちをいつも持っています。どこか一部分でも、相手のチームより良かったというところが試合で出せれば良いな

と。自分たちが勝ったからどうこうではないのですが、勝つ味わえるサッカーの楽しさや喜びがあると思うので、それを子どもたちにも知ってほしい、感じてほしいと考えています。

■今こうして地元において感じることは、自分たちがしてもらったことは返さないといけないということ。サッカークの指導を始めたときにある先輩から言われたことでもあります。そういう先輩たちがいて、築いてきた土台があつて、その中で私たちはたまたまこの年に生まれて、たまたまこの状況があつただけです。あの優勝はそれを作りあげてきた先輩たちのおかげだし、地域のおかげだし、その姿を見て自分たちもやらなければいけないと感じています。良い経験をさせてもらった分、それを還元しなければならぬという気持ちは、あの優勝があつたからこそだと思います。

■当時のチームメイトについて――一つ話しておきたいことがあります。あのとき私は2年生でしたが、大会の登録メンバーに1年生がいなかったため、洗

濯は2年生の役割でした。大会中の宿舎に洗濯機がなかったため、冬の寒い時期に外のコインランドリーに行かなければなりませんでした。ある日、いつものように洗濯物を各部屋から回収しようとしたら、ここに名前のない3年生が代わりにやってくれていたのです。あれにはすごく感謝しています。その人たちは今も足を向けて寝られないというか、私があつた大会で一番心に残っていることです。

■優勝したときのチームは、特に3年生が、試合に出ている選手と出ていない選手の間に溝がありませんでした。お互いに切磋琢磨しながらも、仲良く過ごす場面もあつて、すごくチームワークが良かったです。

■一緒に下宿をしていたチームメイトはメンバーに入れませんでした。その彼がいつも変わらなくしてくれたのはありがたかったですね。

“石橋先生は一つの目標
日本代表選手を育てたい”

石橋監督の監督像――
加とにかく厳しかったですよ

ね。サッカーだけではなく、学校生活など色々な面で。「普段の生活から厳しくやらないとサッカーなんかできないよ。しんどいことが頑張れないよ」とよく言われました。当時は素直に聞き入れられる歳ではなかったのですが、今思うとやっぱりそういうことが大事だと思えます。結局自分も同じことを言っていますから。あそこまでのレベルは要求できませんが、「宿題をやらないのにサッカーなんてできるか。授業中まじめにしないのにしんどいこと頑張れないぞ」ということは同じように伝えていきます。大人になつて分かることがたくさんあるんだなと感じています。

■“明るさ、まじめさ、素直さ”。この言葉をすごく覚えていました。「こんな田舎にいる者がこの3つをなくしたら何もできないよ」ということをよく聞かれましたね。

■今自分が教える側になって、同じことはできないなという気がします。あそこまでの指導や、徹底させるところとか。とても厳しかったですが、指導者としての一つの目標ですよ。

全国大会登録メンバー

監督/石橋 智之 コーチ/松中 浩

背番	位置	氏名	学年	出身中
1	GK	加賀山 和宏	3	吉 田
2	DF	吉本 祐一	3	御 荘
3	DF	岡原 正佳	3	一本松
4	DF	實好 礼忠	2	城 辺
⑤	DF	大西 貴	3	城 辺
6	DF	大藤 貴行	2	垣 生
7	MF	山口 芳幸	2	御 荘
8	MF	矢野 浩	2	三津浜
9	MF	渡部 和仁	3	拓 南
10	MF	黒田 一則	3	城 辺
11	FW	西田 吉洋	2	御 荘
12	MF	木田 茂雄	3	城 辺
13	FW	山本 雅貴	2	一本松
14	FW	山下 和人	3	城 辺
15	MF	二神 洋幸	2	城 辺
16	DF	藤田 有紀	3	城 辺
17	GK	唐田 幹夫	3	御 荘

○は主将



第68回全国高校サッカー選手権大会優勝写真(南宇和高発行の優勝記念誌より)

指導者として目指すこと―

■自分が教えている子たちにサッカーを続けてほしいし、何らかの形でずっとサッカーに関わっていくような選手を育てられたらと考えています。

■加自分が指導する選手の中から日本代表選手が出てきたらと思っています。その選手が代表戦に出場して、「こいつ教えたんよ」と言えるような日が来ると良いですね。

■僕も日本を代表するような選手を育てたいと思っています。そういうところをもちろん目指していますし、今はチームを持たせてもらっているのですが、そのチームをできるだけ高いところにといいことを考えてやっています。

「感謝しかない」

サッカーで恩返しできたら

もう一度あの優勝を振り返ってみて―

■あのチームは目標ですよ。技術面、チームとしての結束力、それから人間性。指導者として、あのチームにいたような選手、人間を育てたいという目標になっていきます。

■今振り返ったら感謝しかありません。ああいう場に立たせてもらえるような環境でサッカーができたこと、応援をしてもらえたこと。全国大会を終えて地元へ帰ってきたときも、地域の方の応援をすごく感じました。決勝戦で先制点を取られたことや、大会通算五千ゴール目を決められたこと、あのプレーはもうちょっとこうしたら良かったとか、悔しいことや思い出はたくさんあるのですが、結局、最後は「ありがとございまして」っていう感じですよ。

■南高、そして南宇和のサッカーについて思うこと―

■サッカーの指導を始めたときから、高校まで続けられる子を

育てたいという気持ちでやってきました。自分たちが教えた子が南高に行っていることで、その動向は常に把握していますし、全国大会から遠ざかっている現状には自分の力不足を感じています。勝ち負けではない部分はあるのですが、やはり負けたいという結果を聞くとすごく悔しいし、自分ももっとやらなければならぬと感じます。

■強い南宇和というのに期待はしませんよ。僕は地元にいる訳ではないので申し訳ないのですが、よく試合をさせてもらったり、トレセン(合同で行う活動)で南宇和の選手と関わることがあります。この子たちがこのまま高校まで続けてくれたら強くなるだろうなと思える選手がたくさんいます。そういう子たちがこれから強い南宇和を作っていくてくれたらと思います。

■南高の試合の結果はやっぱり気になります。自分はここで育ててもらいました。南宇和に来ておかげで色んな経験をさせてもらいましたから、今でも特別な場所ですし、サッカーを通じて返せるものがあればと思います。